不孝兒

美知代

一

東京へ出たのは九月の初旬、まだ其頃は單衣一枚の、此樣な境遇には至極氣樂であつたが、霜が下りて雪さへ降つて、大晦日をつい眼の先きにひかへても、未だ思はしい職業が無いので、流石に信夫も落膽して、今日は終日下宿の屋根裏の三疊の室に閉籠つた儘、頻りと吐息に暮れて居る、歳は二十と云ふのであるが、非常にふけて誰でも三四とよりは信じ無い痩形の、顏には絶へず淋し相な色が漂ふて、黑眼勝の涼しい瞳と引しまつた口元とが僅に氣色を引立てゝ、而して其性質と云つたら一體が沈んだ側で、陽氣な事が大嫌ひ、道を歩くにも成可く賑やかな往來を避けて、少し位迂曲に成つても淋しい小路を通り度いと云つた樣な、誠に涙もろくて、それかと思へば案外元氣で斯うと思ひ込んだら、いつそ片意地な位信夫はもと京都の産で、幼うて父を失ふた身ではあるが、やさしい母の手一つに何不自由も知らず育てられ、行末は文科にとの希望を持つて、第三高等の俊秀と性の肺を病んでなくなつた。と其氣落ちやら何やらで引續いて祖母にも逝かれ、重々の不幸に浦若い康子はと胸を突いた其頃は既う葉村も家庭を成して居たのであるが、康子の事を聞き知つた時、今更其身の儘ならぬを悔ひたと云ふ、以前の事も有つて見れば、よしや葉村が訪れたとて無論二人は逢ふべきでは無いけれども、康子は此世に只一人、まこと楫を絶へた捨小舟のそれにも似た頼り無い身では無いか、云ひ知らぬ佗しさ心細さに、只一言の慰めも身にしみて嬉しう感じられるものを、嗚呼弱い女性の身としてこれ程悲しい事が有らうか、葉村は度々訪れて次第に足繁く成つたが、康子は何やら氣濟まぬ乍らも、亦言ひ知らぬ慕しさに來るなと斷ることは出來ないので……二人は何時しか恥かしの仲とはなつた、が如何して其樣な關係を生じたのか、それは康子自身にも解ら無い、つまり魔がさしたとでも云ふのであらう、有繋に世間の手前もあれば、さぞや恐ろしの間に屢々おのゝきもしたであらう、されど二人は其後十幾年と云ふ永の年月、密にあるまじき罪を重ねて、何も知らぬ信夫は只もう葉村を伯父樣と慕ふいぢらしさ。其間に少しの疑も生じ無いので、多分幼い時から明募出入る葉村の、宛ら實の兄でゝもあるかの樣、互に親しむ樣子を見馴れた故でもあらう。

けれ其密事の顯れぬ道理は無い。或夜の事である、避暑先きより歸つた信夫は忌はしの光景を見た、と激しい恐怖が稻妻のやうに全身を貫き通して、遮二無二おもてをさして駈け出した。やがて氣付いて見れば其處は上賀茂の、社は一帶の山を負ふて、近く疎竹の生ひ散ばつた間々から、夜風に載つて新穗の香氣が流れ來る松の並木に倒れた儘。

鳴呼恐ろしの打擊！

信夫は只もう譯も無しに泣いた、否滿足には泣く事も出來なかつた、夢の樣な其場のしぎを思ふては、呆然眼を瞋つてばかり、まるで失心した人の樣であつたがしと〳〵と迫る秋の夜風に、薄ら寒い霧が四邊をこめて、袂に露の置き添ふ頃、漸く微かな本心の光を認めた、而して、而して信夫は、終に懷しく且いまはしの母を捨てゝ、唯赤手空拳を便りに、人惶ろしい都門を、闖ひの場にと決心したの

呼ばれて居たのであつた。が種々込入つた事情が有つて……と云ふのは別でも無い、堅く信じて密に誇りもした母康子の思ひ掛けも無い、不行跡が原因なので。其昔康子は幼な馴染の葉村と云ふ青年に人知れず戀して居たが、年頃に成つては門閥自慢の地方一流の家柄として、一代者の葉村づれとはてんで身分が違ふと云ふのを理由に、すつかり交際を差止められたので、それに付いては甚麼に煩悶したであらう、けれ共康子は其時やつと十七歳の少女で、其上兎角内氣な質であつた爲め、只もう意生地も無く、早く兩親に別れた身は、年老つた祖母の意に逆ふのが如何にも辛く、其後間もなく信夫の父なる者を養子として、門地家格ふさわしき家の二男と計り、其外の事は一切知らず、世間一般の若い娘御達と同樣、康子は何の考へも無く、云はゞ無意識の中に一生の大事を定めたのである。

信夫を產んで康子の覺悟が漸く定まると其内には、自然夫婦の間に多少の愛情も湧いて、先づは平和に美しの家庭と他所見には羨まれもしたが、平常から兎角病身な良人は、信夫が三つに成つた正月急

である。

（つゞく）